

園生活における行事と指導の在り方に関する一考察

—『幼稚園教育要領』の変遷を通して—

国士館大学非常勤講師 浜野兼一

概要

近年、我が国においては、核家族の増加や少子化の進行が家族という集団の縮小化を招いている。こうした現状は我が国の家族システムの機能や構造を大きく変えるとともに、家庭の教育機能の低下を招いている。このような子どもの置かれた状況から問題解決の方策を考えると、家庭、地域、教育機関の連携・協力が必要となる。こうした点を踏まえて、本稿では、園生活における行事と指導の在り方を取り上げ考察することとした。この理由は、幼児教育の場で行われる行事が家庭生活との関わりにおいても重要な意味を持っていると考えるからである。一方、幼稚園と家庭との緊密な連携という点に目を向けると、保育者養成教育を受ける学生も幼稚園での行事について深い理解をする必要があるといえよう。

以上を踏まえて、本稿では、基本的生活習慣や社会性涵養の基礎をつかさどる幼児教育に焦点をあて、「『幼稚園教育要領』の史的展開からみた行事の位置づけと指導の視点」「小学校教育との接続を踏まえた行事における指導の在り方」について考察した。

キーワード 「行事」「指導」「歴史」

はじめに

近年、我が国の家庭の教育力低下が叫ばれている。この背景には、家庭教育の場である家庭や家族そのものが、大きな変化を示してきているという状況がある。とりわけ注目しなければならないのが、核家族化と少子化の進行である。核家族化の進行や少子化の傾向は家族という集団の縮小化を招いており、これは我が国の家族システムの機能や構造を大きく変えてきている。このように家族システムが構造的に変容しているなか、今日の家庭は、「父親不在」や「家族の人間関係の揺らぎ」など様々な問題を抱えている。

家庭は、子どもが基本的生活習慣や社会性など、人間として生きていくための事柄についての教育を受ける最初の場合である。このことから、生育環境という観点から家庭をみた場合、その良し悪しが子どもの発達に大きな影響を及ぼすことになる。その家庭の教育機能が低下したのでは、子どもたちの発達に負の影響を及ぼすことになる。こうした事態が望ましいものでないのは言うまでもない。子どもの置かれた現状を踏まえて、問題解決の方策を考えると、必要となるのは家庭、地域、教育機関の連携・協力であろう。とりわけ、成長の過程において子どもが家庭の次に属する社会集団である教育機関の役割は少なくないと考えられる。

本稿で園生活における行事と指導の在り方を取り上げる理由は、幼児教育の場で行われる行事が家庭生活との関わりにおいても重要な意味を持っているからである。例えば、林猛は園行事の一つである誕生会について、誕生を祝う行事は入園以前において家庭で営まれるものであるが、その家庭行事が家庭の枠を超えた場で行われることで、誕生日のもつ意味が一層明確化するとしている¹。誕生会

は子どもに生活の節目を知らせるものであるが^二、ひな祭りや七夕といった伝統的行事などにも同様の視点を見い出すことができるのではないだろうか。こうした点と幼稚園教育要領に明記されている幼稚園と家庭との緊密な連携^三という視点を踏まえると、保育者養成教育を受ける学生も幼稚園での行事についての深い理解が必要であるといえよう。

以上を踏まえて、本稿では、基本的生活習慣や社会性涵養の基礎をつかさどる幼児教育に焦点をあて、保育者養成教育の場で行われる行事の役割や指導の在り方について考察する。

本稿の内容としては、はじめに、『保育要領（試案）』や『幼稚園教育要領』における行事の位置づけと指導の視点を史的側面から検討する。次に、小学校教育との接続を踏まえた行事における指導の在り方を考察する。

一．『幼稚園教育要領』の史的展開からみた行事の位置づけと指導の視点

（一）『保育要領（試案）』と昭和三十一年版『幼稚園教育要領』

本節では、『保育要領（試案）』や『幼稚園教育要領』に示されている行事に関する記述を分析し、その取り扱い方や役割、指導の視点などを浮かび上がらせる。

昭和二十二（一九四七）年に発行された『保育要領（試案）』^四は幼児期における発達の特質や生活指導などについて解説しているが、行事に関しては次のような内容が示されている^五。

幼児の情操を養い、保育に変化と潤いを与え、郷土的な気分を作ってやる上から、年中行事はできるだけ保育にとり入れることが必要である。

元来、わが国古来から行われている年中行事、ことに祭などは、子供が参加し、楽しむ行事になっている。たとえば、三月のひな祭、五月の端午の節句、七月のたなばたなどは子供を中心にしている。これをそのまま保育に取り入れて、ともに楽しみ合う気持ちを養うことができる。

年中行事には自然物がきわめて巧みに取り入れられている。たとえば、ももの節句、しょうぶの節句、月見の秋の七草、クリスマスツリーなど、生活を自然に結びつけさせる味があり、また人間の美しい気持ちを表現しているもの、または慈悲・博愛・感謝・報恩の人間的な美しい精神や社会的生活の楽しさを表わしているものが多い。たとえば母の日、彼岸会、国の記念日、祝祭日等、みなそれである。

これらの日にふさわしい催しをすることは、教育上有意義である。

園の行事としては、創立記念日、園児や先生の誕生日の会などを開くのもよい。

この機会をとらえて幼児に集会の作法を正しく教えたい。

上記は、「年中行事」の項目に示されている内容であるが、記述を分析してみると、保育の場における我が国の伝統的年中行事の必要性に触れている点が確認できる。しかし、園の行事の具体的な内容までには踏み込んでいない。また、指導の視点についても「この機会をとらえて幼児に集会の作法を正しく教えたい」としているのみで、具体的指針は示していない。なお、遠足を取り上げている「見学」の項目は注目すべきである。なぜなら、ここでは遠足の実施時期や回数、内容などにも言及しているからである^六。

ところで、『保育要領（試案）』は、幼稚園、保育所、家庭等を包含した保育の手引書として発行されたものである。このことから、戦後我が国における新しい保育の形成に向けた指針になったという

点で、同要領が果たした役割は少なくないといえよう。

その後、『保育要領（試案）』は見直され、昭和三十一年には幼稚園の教育課程のための基準を示した『幼稚園教育要領』として刊行されるに至った。では、昭和三十一年版『幼稚園教育要領』において、行事はどのように取り扱われているのだろうか。次に示すのが、「第Ⅱ章 幼稚園教育の内容」にみえる行事関連の記述である。

「社会」

幼稚園や家庭や近隣で行われる行事に、興味や関心をもつ。

○遠足・運動会・発表会・誕生会・ひな祭りなど、幼稚園の行事に喜んで参加する。

○近くの小学校で催される運動会などの行事を見に行ったり、参加したりする。

○みんなといっしょに国の祝日などを楽しむ。

ここでは、「社会」という視点を踏まえ幼稚園の行事として、遠足・運動会・発表会などを例示するとともに、園児が小学校で催される行事に触れることの必要性にも言及している。一方、上記「社会」のはじめに示されている「幼稚園や家庭や近隣で行われる行事に、興味や関心をもつ」という指針は、第Ⅲ章（指導計画の作成とその運営）の「季節とか、幼稚園や地域社会の行事を考慮して計画を立案すること」に呼応している。

このように、指導計画作成の内容に行事が明記されたことで、幼稚園の教育課程編成における『幼稚園教育要領』の基準性が前面に押し出されることとなった。これに伴って、学校教育法施行規則においても小学校や中学校と連動するかたちで「幼稚園の教育課程は、幼稚園教育要領の基準による」と規定されるに至った。

これにより、『保育要領（試案）』からの脱却がはかられたといえる。そして、こうした展開が三十九年版『幼稚園教育要領』への布石にもなったと考えられる。周知の通り、指導計画を立てる際には教育課程の内容を参考にする必要がある⁴が、その教育課程の内容構成に園の行事の数や教育方針などが与える影響も少なくないといえよう。

（二）文部省告示以降の『幼稚園教育要領』

昭和三十九年には『幼稚園教育要領』が改訂され、これに伴って学校教育法施行規則も一部改正された。前節で触れたように「幼稚園の教育課程は、幼稚園教育要領の基準による」がそれまでの規定であったが、法改正により次のように改められた。すなわち、「幼稚園の教育課程については、この章に定めるもののほか、教育課程の基準として文部大臣が別に公示する幼稚園教育要領によるものとする。」と規定されたのである。

昭和三十三年以降、小学校・中学校、高等学校の『学習指導要領』が相次いで文部省告示として公示されたが、『幼稚園教育要領』もこの動きを受けるかたちで、昭和三十九年には文部省告示として公示された。

これにより、『幼稚園教育要領』は昭和三十九年の改訂以降、小学校・中学校、高等学校と同様に教育課程編成の拠りどころとなる全国的基準としての性格が、より一層明確となった。

一方、この時期における保育全般の動きに目を向けてみると、昭和三十八年には、文部省と厚生省が共同で、幼稚園と保育所の機能や役割について次のような見解を明らかにした。すなわち、「保育所の持つ機能のうち教育に関するものは、幼稚園教育要領に順ずることが望ましい。このことは、保育

所に収容する幼児のうち幼稚園該当年齢の幼児のみを対象とすること」とされたのである^九。

すでに厚生省は、保育所保育に関して『保育所運営要領』（昭和二十五年）と『保育指針』（昭和二十七年）を刊行していたが、昭和三十八年の共同見解を受けて昭和四十年には「保育所保育指針」が通知・施行されることとなった。

以上を踏まえて、文部省告示以降の『幼稚園教育要領』に示されている行事関連の内容を整理すると表一のようになる。

表一 文部省告示以降の『幼稚園教育要領』にみる行事と指導の視点

	内容（平成元年版以降は「ねらい及び内容」）	行事に関する記述	指導の視点
昭和三十九年版	健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作	第二章 内容 「社会」 三 身近な社会の事象に興味や関心をもつ (六) 幼稚園の行事に喜んで参加する。 (七) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。	第三章 指導及び指導計画作成上の留意事項 指導上の一般的留意事項 (十一) 幼稚園における行事の指導にあたっては、幼児の生活に変化やうるおいを与え、その充実に役だたせるように指導すること。なお、地域的な行事や全国的な行事などについては、その教育的価値をじゅうぶん検討し、適切なものを精選すること。また、国民の祝日などについては、幼児の心身の発達の程度に応じて、その意義を理解させ、それに親しみをもたせるようにすること。
平成元年版	健康、人間関係、環境、言葉、表現	第二章 ねらい及び内容 「環境」 (十) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。	第三章 指導計画作成上の留意事項 特に留意する事項 (六) 行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然な流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し適切なものを精選し幼児の負担にならないようにすること。
平成十年版	健康、人間関係、環境、言葉、表現	第二章 ねらい及び内容 「環境」 (十一) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ	第三章 指導計画作成上の留意事項 特に留意する事項 (四) 行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活

			動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。
--	--	--	-----------------------------------------------------------------------

平成元年版において、「内容」が「ねらい及び内容」に変わり、それに伴って領域も六から五に変更された。また、指導計画作成上の留意事項についても内容が見直され、幼児の主体性を育むという視点が盛り込まれた。

二. 小学校教育との接続を踏まえた行事における指導の在り方

周知の通り、幼稚園は学校教育法第一条に定められる正規の学校である。したがって、幼稚園の教育活動に携わる者には、学校段階の連続性に配慮した取り組みが求められているといえる。本節では、こうした点に着目して、小学校教育との接続を踏まえた行事における指導の在り方を検討する。

『保育要領（試案）』の冒頭では、幼稚園も新しい学校教育法により、学校の一種として、すなわち正式の学校教育の系統の出発点として、はっきりした位置を認められることになった。これは、小学校入学前の幼児期に対する教育の機関が必要なことを世人が理解し、それへの関心が高まったことを意味するものである、としている⁺。また、現行の幼稚園教育要領においても、幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること、としている^{十一}。

本稿の冒頭でも述べたように、幼児教育において行事は重要な意味を持っていて、保育者養成教育を受ける学生も幼稚園での行事について深い理解をする必要がある。この点を考察するため、次に小学校教育との接続を考えた場合の課題を明らかにし、行事における指導の在り方を検討する。

（一）幼稚園と小学校教育との接続を見据えた指導の課題

中央教育審議会は、平成十一年十二月に出した答申の中で初等中等教育の役割に言及し、幼児教育段階に関して次のような見解を示している。

幼児教育においては、小学校段階以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、基本的生活習慣の形成・定着、道徳性の芽生え、創造的な思考や主体的な生活態度の基礎などを育てる^{十二}。

これは幼児教育全体からみた教育目標として示されているが、「道徳性の芽生え」や「創造的な思考」の育成などは、行事における指導の課題と考えることもできるであろう。なぜなら、「道徳性の芽生え」や「創造的な思考」の育成は園生活における行事を通じて学ばせることが望ましいと言えるからである。

小学校段階では日々の学校生活の中で、児童が日常生活に必要とされる諸能力を養うことになる。すなわち、初等普通教育を通じて、基本的社会生活を営むために必要とされる様々な資質や能力の基礎を習得するのである。したがって、小学校段階の教育への接続に配慮するとともに、園の子どもたちが行事を通して自分自身の個性を見出すことができるよう、その基礎をいかに育てるのか、という課題もある。

一方、変化の激しい時代を迎え、こうした変化に対応しきれない子どもの現状に目を向ける必要が

ある。例えば子どもの身体の発達が早まる傾向にあるものの、生活における主体性や自律の面など精神的部分では、自立が遅れる状況もみられる。

中央教育審議会は、先に取り上げた答申において、幼児教育と小学校低学年の連携・接続の課題に触れ、「この段階は、集団生活や具体的・体験的な活動を通じて総合的に学習を行う段階として共通性を有しており、小学校低学年の教科を大きくくりこみ編成したり、児童の生活に即した課題を活動や体験を重視しつつ総合的に学習させるなどの研究が行われている^{十三}」としているが、こうした見解も園の行事の指導との関わりの中で検討すべき課題であろう。

（二）行事における指導の在り方

幼稚園と小学校教育との接続を見据えた上で、園における行事の指導の在り方を検討するにあたっては、本格的な幼小連携に向けた施策が必要となろう。場合によっては、小学校低学年の教育課程の見直しも求められる。こうした点を踏まえて、次に、前節で示した課題に対する方策を検討する。

まず、保育者養成教育を受ける学生自身が、養成段階において様々な知識や豊かな体験を得ることが必要となる。具体的には、一般教養や教職科目だけでなく、就業体験などを積極的に行わなければならない。こうした取り組みを推進することにより、指導者としての資質の向上が期待できる。

また、園生活の現場では、小学校・幼稚園間の情報交換や行事への相互参加など教職員間の交流をはかるべきである。例えば、運動会や学芸会、発表会等の行事を通して幼児と児童が交流する場合、小学校・幼稚園間が連携できるよう小学校・幼稚園の教員が協力することは、指導の場面において不可欠である。

ここで、指導計画作成上の留意・配慮事項について、現行の幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の内容を比較してみると表二のようになる。

表二 幼稚園教育要領・小学校学習指導要領の内容の比較

	幼稚園教育要領	小学校学習指導要領
指導計画作成上の留意・配慮事項	行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。	学校行事については、学校や地域及び児童の実態に応じて、各種類ごとに、行事及びその内容を重点化するとともに、行事間の関連や統合を図るなど精選して実施すること。また、実施に当たっては、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合い、自然体験や社会体験などを充実するよう工夫すること。
行事における国旗・国家	幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。	入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。

確かに、幼稚園の行事と小学校の行事は内容やねらいが質的に違うものも少なくない。しかし、表二をみると、行事の精選や発達段階への配慮など指導計画作成上の方向性には、共通の視点もみられる。幼稚園の行事における指導に際しては、こうした配慮事項に依拠しつつ教員は小学校段階への接

続という部分に留意し園児たちに創造的な思考を育んでいかなければならない。

おわりに

以上本稿では、幼稚園教育要領の変遷を通して園生活における行事と指導の在り方について考察した。

第一節では、『保育要領（試案）』を起点として、その後の『幼稚園教育要領』の内容を分析した。この結果、『幼稚園教育要領』の史的展開からみた行事の位置づけと指導の視点を見い出すことができた。第二節においては、幼稚園と小学校教育との接続を見据えた指導の課題や行事における指導の在り方の検討を行った。この結果、小学校教育との接続を踏まえた行事における指導の在り方が明らかとなった。

以上の検討を踏まえて、指導者からみた園生活における行事の意義と課題を述べる。

まず、園の行事については、既述したように『幼稚園教育要領』において目標やねらいなどの基本的枠組みを提示しているが、その内容や実施時期、回数などは現場の裁量に委ねられている。こうした点は、幼児の個性や発達段階に対応した指導を行うためにも必要である。ここに、指導者からみた意義の一つを見い出すことができる。しかし、現場の指導者は、幼児における学びや発達の連続性を念頭において行事の計画をたてる必要がある。小学校の特別活動に設定されている儀式的行事、学芸的行事、健康安全・体育的行事などへの接続に配慮し、且つ幼児が主体的にしかも楽しく活動できるような行事にするという視点を持たなければならない。これらは、園の行事において指導者に求められる課題といえよう。

今後の研究課題としては、まず、幼稚園の行事について本稿で取り上げた『幼稚園教育要領』以外の事項を検証する必要がある。また、本稿で考察することができなかった幼稚園における行事の内容や実施状況、指導法についても検討しなければならない。なお、これらは、戦後我が国における幼児教育の政策や実態などをめぐる動向の中で考察したい。

一 林猛「幼稚園年中行事における民俗性について」(九)『武蔵野短期大学研究紀要』第十五号 二〇〇一年六月 五四頁所収。

二 森上史朗・渡辺英則・大豆生田啓友『保育方法・指導法の研究』ミネルヴァ書房 平成十六年十月 一五七頁。

三 文部科学省『幼稚園教育要領』（平成十年告示）「第3章 指導計画作成上の留意事項」平成十年十二月。

四 『保育要領（試案）』は、幼稚園・保育所・家庭における保育全般に関する手引書という性格を有していた。

五 文部省『保育要領（試案）－幼児教育の手びき－』（昭和二十二年度）「六 幼児の保育内容－楽しい幼児の経験－」昭和二十三年 三月。

六 「見学」の項目には次のような内容が示されている。「特に乗物でも利用するような遠足は、春と秋と一回か二回行い、その時は親達も同行するのが望ましい。園外保育の前には実地調査をし、途中の危険の有無を確かめ、万一の場合のために救急箱を持って行く。行く前に、幼児たちと、見てくるものについて話し合いをしておくのがよいし、帰ってから見て来たものについて発表させるのもよい。更に持って帰った草花を花びんにさしたり、木の葉・木の実・貝がら等のくらべっこ、なら

べ遊びをしたり、小川でとってきたおたまじゃくし・めだかを池に放したり、ちょうやばったを飼育したりするのもおもしろい。また、見聞して来たことをもととして、いろいろのごっこ遊びなどを展開することもよいであろう。」

七 文部省『幼稚園教育要領』（昭和三十一年）「第二章 幼稚園教育の内容」は、「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作の」六領域で構成されている。

八 芝崎良典・石田裕子・山崎晃「我が国の幼稚園における指導計画の立案時の留意点について年報」（『幼年教育研究 第二十四巻』二〇〇二年 七一頁所収）。

九 昭和三十八年に文部省初等中等教育局長と厚生省児童家庭局長が保育所運営指針について共同で通達した。

十 前掲『保育要領（試案）』「まえがき」による。なお、「七 家庭と幼稚園」でも小学校との連絡に触れ、就学前の教育と、就学後の教育とは、ともに一貫した目的と方法とを持たなければならないことを書き添えるにとどめておく、と述べている。

十一 前掲『幼稚園教育要領』（平成十年告示）「第三章 指導計画作成上の留意事項 ～一般的な留意事項～」。

十二 中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」第二章 初等中等教育の役割 平成十一年十二月十六日。同答申では、幼児期から初等中等教育を一貫してとらえて各学校段階間の連携を一層強化するための指針として、カリキュラムの一貫性や系統性の確立の必要性に言及している。

十三 「同前書」。